

## 神に選ばれたダビデ

(サムエル16・1〜13)

### 一、徹頭徹尾神によって

ここには、初代イスラエルの王サウルが退けられた後、次の王としてダビデがどのようにして選ばれたかが書かれています。ひとこと言うなら、徹頭徹尾神によって導かれ、指名されました。1節をご覧ください。〈主はサムエルに仰せられた。「いつまであなたはサウルのこと悲しんでいるのか。わたしは彼をイスラエルの王位から退けている。角に油を満たして行け。あなたをベツレヘム人エッサイのところへ遣わす。わたしは彼の息子たちの中に、わたしのために、王を見つけたから。〉 16章を読みますと、神ははっきりと、しかも具体的に導かれたと教えられます。だからといって、主が常にこのような形で導かれると考えるならまちがいです。多くの場合に、「沈黙」という形で導かれることもあるからです。さて、この具体的な導きの前に、サムエルは恐れを抱きます。2節前半です。〈サムエルは言った。「私はどうして行けましょう。サウルが聞いたら、私を殺すでしょう。〉」 かつてサウルが王として選ばれた時点においては謙遜でした。しかしひと度権力を握ってしまうと、それ

を絶対に手放さないタイプの人間であったようです。そこにサウルの罪があらわれています。サウルは神を畏れるのではなく民の視線を気にしました(↓サムエル15・30)。これは、イスラエルの王の務めを続けて行く際に、最も不適切な性質でした。ですから、サウルは自分の血筋でない他者が王位を継ぐことを許せませんでした。

さて、恐れを抱いたサムエルに、主は再び語られました。2節後半から3節です。〈主は仰せられた。「あなたは群れのうちから一頭の雌の子牛を取り、『主にいけにえをささげに行く』と言え。いけにえをささげるときに、エッサイを招け。あなたのなすべきことを、このわたしが教えよう。あなたはわたしのために、わたしが言う人に油をそそげ。〉」 こうしてサムエルはベツレヘムの町に入り、「平和なことでおいでになったのですか」と、恐れて出迎えた長老たちに言いました。5節です。〈サムエルは答えた。「平和なことです。主にいけにえをささげるために来ました。私がいけにえをささげるとき、あなたがたは身を聖別して私といっしょに来なさい。〉」 こうして、サムエルはエッサイとその子たちを聖別し、彼らを、いけにえをささげるために招いた。と。エッサイには七人の息子がいました。最初に連れられてきたのは長男のエリアブでした。その時のことです。6節に〈彼らが来たとき、

サムエルはエリアブを見て、「確かに、主の前で油をそそがれる者だ」と思った。とあります。エリアブは、容貌がよろしく、背が高かったのでありましよう。ですから、サムエルは「この人だ!」と思つたのでありましよう。ですが、主は言われました。7節です。〈しかし主はサムエルに仰せられた。「彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見えないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。〉」と。おそらく、エリアブはサウルが選ばれたときのような容姿だったのでありましよう。

### 二、主は心を見る

ここで、主がおっしゃった、興味をそえられる言葉を見てまいります。それは6節の〈人はうわべを見るが、主は心を見る。〉です。〈主は心を見る〉とは、主がその人の内側にある神との関係を見ることです。マタイの福音書5章3節の「心の貧しい者は幸いです」、すなわち「自分の貧しさを知る人は幸いです」という、主イエスの言葉と重なります。続いて、父エッサイは次男エリアブを呼んでサムエルの前に立たせました。サムエルは「この者もまた、主は選んでおられない」と言いました。さらにエッサイは三男のシヤマを進ませましたが、サムエルは「この者もまた、主は選んでおられない」と言いました。こうして、

四男、五男、六男と、サムエルの前に進ませましたが、サムエルは語りました。「主はこの者たちを選んではおられない。」と。サムエルはエッサイに言いました。11節前半です。〈サムエルはエッサイに言った。「子どもたちはこれで全部ですか。〉」と。エッサイは答えました。11節後半です。〈エッサイは答えた。「まだ末の子が残っています。あれは今、羊の番をしています。〉」サムエルはエッサイに言った。「人をやって、その子を連れて来なさい。その子がここに来るまで、私たちは座に着かないから。〉」 〈末の子〉とはダビデです。ダビデは父エッサイの思いの中に入っていませんでした。こうして、末息子ダビデが連れてこられます。12節です。〈エッサイは人をやって、彼を連れて来させた。その子は血色の良い顔で、目が美しく、姿もりっぱだった。主は仰せられた。「さあ、この者に油をそそげ。この者がそれだ。〉」と書かれています。少年ダビデは〈血色の良い顔で、目が美しく、姿もりっぱだったと書かれています。しかしそのことと神の選びとは関係ありません。ダビデこそは、若いときから「心の貧しい者」、すなわち「自分の貧しさを知る人」でした。手がきよく、心がきよらかな者、そのたましいをむなしいことに向けず、欺き誓わない人でした(↓詩篇24・4)。こういう器が神の務めをするにふさわしい人です。昔も今も同じです。